

バーセットシャーにおけるトロロープの トーリー・ヴィジョン

波多野葉子

Anthony Trollope's Tory Vision in Bassetshire

Yoko HATANO

Abstract

Trollope's Bassetshire Chronicles are characterized by medieval sentiments explicitly and coherently conveyed by his Tory vision. The main motif of the Chronicles is the struggle of the old order, based on rural tradition, against the encroaching materialism and commercialism of the new power. Trollope's Tory vision is shown in his affirmation of the Tory and High Church landlords and clergy who are faithful to their paternalistic and pastoral duties; in contrast, his negation of the Whig and Low Church camp is clear in their negligence of their duties and their urban inclinations. His affirmation of Toryism is further reinforced by the ancient lineage of the Tory families, which far predate those of their Whig opponents. Trollope's Tory vision is tied to Disraeli's Young England movement; at the same time, it is attributable to the Oxford Movement, thus proving its tie with medievalism.

Key words: Trollope, Tory, medievalism, Bassetshire, High Church

ヴィクトリア朝は産業革命により、社会、経済、政治構造の基盤が土地から資本に変遷した過渡期であったばかりでなく、物理的にも国土が変貌した激動の時代であった。この変化はあまりにも広範かつ劇的であったので、人々の価値観や精神、さらに時代思潮にも影響を与えた。なかでも産業革命以前のジェントリーを中心とする田園社会を理想化し、過去への回帰願望を特色とする中世主義 (medievalism) は、時代を代表する思潮となり、その影響は、政治、宗教、芸術、建築、文学等様々な分野で見うけられた。本論では、トロロープ (Anthony Trollope, 1815-81) の「バーセッ

トシャー物語」(“ The Chronicles of Bassetshire ”, 1855-1867)¹⁾の主題と特徴が、彼のトーリー主義 (Tory vision) を反映しており、従って中世主義の文学的表象であることを論述することを第一の目的とする。その過程で、トロロープのトーリー主義と、政治的、および宗教的中世主義運動との関連性を考察する。

・パーセットシャーの危機

「パーセットシャー物語」はトロロープのトーリー主義に起因する反都市の感情で満ちている。この作品群のモチーフは、土地を基盤とする伝統的な支配階級と資本を梃子に勢力を拡張してきた新興勢力の対立であり、この新興勢力の生み出した都市の物質主義、商業主義、進歩主義に旧勢力が脅かされ、政治、経済力のみならず伝統的精神遺産が崩壊しかかっている危機的状況が、哀惜の念をもって描かれている。トロロープの伝統的な精神文化、価値観を擁護する態度は、作品の主題のみならず、トーリー主義を奉ずる登場人物の擁護に表れており、そうした人物によってパーセットは辛うじて伝統を回復し維持していくのである。

パーセットの伝統的均衡を乱す新旧勢力の対立は、パーセットが政治的に東西に二分されていることに象徴されている。そうした状況を語り手は次のように述べる－

Bassetshire, however, is not now so essentially one whole as it was before the Reform Bill divided it. There is in these days an East Bassetshire, and there is a West Bassetshire; and people conversant with Bassetshire doings declare that they can already decipher some difference of feeling, some division of interests. The eastern moiety of the county is more purely conservative than the western; there is, or was, a taint of Peelism in the latter; and then, too, the residence of two such great Whig magnates as the Duke of Omnium and the Earl de Courcy in that locality in some degree overshadows and renders less influential the gentlemen who live near them.²⁾

従って西はトーリーではあるが進歩派のピールの影響が見えるばかりでなく、ウィッグの掌中にあった。一方東パーセットはトーリーで、ルフトン(Lufton)、グレシャム(Gresham)、ソーン(Thorne)、グラントリー(Grantly)家が名士である。このようにパーセットが二分されているなかで、語り手は、“ But this Western Division can boast none of the fine political attributes which grace its twin brother ”(FP15)、とトーリー色が濃い東が優れていることを語る。

しかし、東は西の攻勢の前に苦戦を強いられていた。ここで問題なのは、伝統的な価値観を持つトーリーの家系が戦う相手は新興勢力の中産階級ではなく、同じ地主階級のウィッグである点である。つまり都市の生み出した物質主義、自由主義は既にウィッグを傘下に収めており、東のトーリーにもその魔手を伸ばしつつあったのである。その顕著な例として、トーリーで高教会派のグラントリー(Archdeacon Grantly)が父である前司教の死が僅かに遅かったために後継者となりえず、保守党から政権を奪ったばかりの自由主義政権から送られたプラウディー(Proudie)が司教の座を継いでしまっていたことが挙げられる。プラウディー派は低教会派に属し福音主義の影響を受けており、保守的な教区内の調和を乱す新参者であった。パーチェスター(Barchester)とその近隣の聖職者はそれまで “ very well inclined to promote high church principles, privileges, and

prerogatives”(BT 39)であったので、福音主義の影響を受けた低教会派の司教が赴任するなど、
 ってのほかであったのである。更にこれまで教区をうまく治めてきたグラントリー達の困惑を増す
 ことには、新任のブラウディ司教は西のウィッグの領主と手を結ぶのである。つまり“cathedral
 town”であるパーチェスターが東にあるにもかかわらず、教会は西のウィッグの影響下に入ってし
 まうことになる。

このように新勢力は既に第一段階の侵略を完了し、ウィッグを通して最終段階の侵略を巧妙に行
 っていた。従って明確に二分されているにもかかわらず、西の物質主義の影響は東のジェントリー
 と聖職者に及んでおり、伝統的精神遺産はまさに瀕死の状態であった。まずグreshamズベリー荘
 園(Greshamsbury Park)の主グresham家は“the finest specimen of Tudor architecture”(DT
 12)に住んでいたが、スクワイア・グresham(Squire Gresham)がデ・コーシーの令嬢であるア
 ラベラ(Lady Arabella)と結婚したことによって、トーリーの伝統は崩壊寸前であった。グresham
 家が元来トロローブの価値観を備えていたことは、屋敷が“Tudor”様式であることから分る。³⁾
 しかしトーリーの語り手は、スクワイアがウィッグの一族から妻を迎えたばかりでなく、妻の実家
 と懇意にしたことを“he had added to his sin”(DT 7)と非難し、そのトーリー精神が腐食して
 しまったことを嘆く。実際妻の実家との付き合いによって、“the respectable young Tory husband”
 は骨抜きにされたばかりでなく、妻の散財によりグresham家の経済状態は抜き差しならぬところ
 まで来ており、その窮状を救うためには、息子のフランクは金目当ての結婚をするしかなかったの
 である。

グresham家ほどではないにしろ、新勢力の攻勢の前にトーリーの伝統が揺らいでいるのはフラ
 ムリー(Framley)のルフトン家も例外ではなかった。以前は“there was no portion of the county
 more decidedly true blue than that Framley district”(FP 14)であったが、息子のルフトン卿は西
 のウィッグと親しくし、領地を離れ自己の快楽を求めていた。彼は“jeers and sneers at the old
 county doings”し、トーリーの領主の伝統的義務を忘れた為に、“He has no idea of his duty, has
 he?”と評されるほどであった。また経済的には屋台骨を揺るがすほどではなかったにしろ、ルフ
 トン家は卿の道楽で財産を多少なりとも失っていた。

この腐敗は地主階級に留まらず、伝統的田園社会をジェントリーと共に支えていた聖職者にも及
 んでいた。彼らの中には教区民の面倒を物心両面にわたり見るといふ本来の義務を忘れ遊興に耽け
 り、物質主義、都市主義に汚染されかけた者がいたのである。まずフラムリーの牧師マーク・ロバ
 ーツ(Mark Robarts)はウィッグとの交際により、信徒の面倒を見ることを怠り田園の共同体の崩
 壊に繋がりがねない行状を繰り返していた。高教会派でトーリーのルフトン夫人(Lady Lufton)は、
 自分の“the lady of the manor”としての領民への義務遂行を支えてくれる牧師を望んでおり、それ
 を実現できる人物と見込んで、息子の親友であるマークにフラムリーの聖職禄を与えたのであった
 - “She was anxious that the parish vicar should be one with whom she could herself fully
 cooperate, and was perhaps unconsciously wishful that he might in some measure be subject to
 her influence”(FP 3).しかしマークは西のサウビー(Sowerby)の依頼を拒めず金を貸し窮地に陥る
 のである。マークの姿には特権の上にあぐらをかき、信徒の面倒も見ず放縦な生活を送る墮落した
 高教会派聖職者へのトロローブの批判が窺える⁴⁾。

またグラントリーは司教の座をブラウディに奪われたことで、教区内での力が弱くなっていたが、
 その劣勢を挽回しようとするあまりに権力闘争に没頭していた。そうした態度は聖職者の務めを自
 ずから蔑ろにさせ、グラントリー家は世俗化し精神的に墮落しつつあった。その象徴が娘のグリセ

ルダ (Griselda) である。一家はルフトン夫人と政治的、宗教的立場を同じくする高教会派のトーリーであったが、美貌の娘をオムミウム公爵と親戚関係にあるウィッグのハートルトップ (Hartletp) 侯爵家に嫁がせる。グラントリー夫妻は娘の出世に喜々とするが、これは一家の信義にかかわることであった。なにしろ、“The Hartletp people were not in her [Mrs. Grantly’s] line. They belonged altogether to another set, being connected . . . with the Omnium interest . . .” (FP 134) だったのである。こうした結婚をしたグリセルダは当然のことながら、一家の伝統的精神を継承していない。彼女が夫を捕まえたのはロンドンであったことが示唆するように、彼女は都市志向の女性であった。実は以前にグラントリー夫人とルフトン夫人の間には、グリセルダとルフトン卿を結婚させようという密約があったのだが、グリセルダでは卿の不在地主の性向を助長するだけで、ルフトン夫人を失望させることとなったであろう。又グリセルダの母方の祖父ハーディグ (Harding) は作品の道義を体現する人物として描かれており、高教会派の聖職者としての伝統的義務に忠実で、心穏やかな、神の愛を具現したかのような老人である。しかし玉の輿に乗ったグリセルダは一介の聖職者にすぎない祖父を恥ずかしく思い、死の床に臥している彼を冷たくあしらうような女性であった。このようにグリセルダがウィッグの侯爵家に嫁いだことが、パーセットシャーのトーリーの “clerical aristocracy” (DT 1) きての名門であるグラントリー家の伝統の崩壊を示唆していると言えよう。

又アリングトン (Allington) 内部では伝統精神は健在であったが、都市から田園世界への侵入者によって、平和な田園の共同体は決定的な打撃を受ける。伯父スクワイア・デイル (Squire Dale) の庇護の下に暮らすリリイ (Lily Dale) は、功利的なクロスビー (Crosbie) と婚約する。しかし彼は彼女には伯父からの遺産は無いことを知ると婚約を破棄し、アレクサンドリナ・デ・コーシー (Lady Alexandrina De Courcy) と結婚する。失意のリリイは一生独身を通し、静かなトーリー主義が醸し出していた “pastoral bliss” には傷が付いてしまう。

・危機の克服

ウィッグの拝金主義の前にトーリーが屈する寸前で、東パーセットでは堅固なトーリーの価値観により、辛うじて田園の伝統を回復させる。まずグreshamズベリーは息子フランクが、私生児でありながら伯父ソーン医師 (Dr. Thorne) の伝統的な価値観を受け継いだメアリ (Mary Thorne) との結婚によって、トーリーの精神遺産を復活させる。メアリはノーブレス・オブリージをよくわきまえ “the lady of the manor” としての資質を立派に備えた利発な女性で、旧家の後継者としての自覚が少々乏しいフランクを助けてグresham家を再興させるのである。二人の結婚を可能にしたのは、労働者階級から爵位を得るまでに出世した母方の伯父の遺産であったが、メアリは遺産でグresham家の経済的困窮を救うばかりでなく、由緒正しいソーン一族の連綿と続いた精神遺産をもって婚家のトーリー精神をも救うのである。

フラムリーではオムニウム公爵に代表される新勢力は、ルフトン夫人の揺るぎ無いトーリー主義の前に敗退する。マークは品行を正しルフトン卿はマークの妹で地主階級の出身ではないが、恵まれない者を助けるノーブレス・オブリージの精神と行動力を立派に備えたルーシー (Lucy Robarts) と結婚することによりフラムリーに落ち着き、不在地主の悪癖を改める。

グラントリー家では、息子の妻にグレイス・クローリー (Grace Crawley) を迎えて、軌道修正をする。クローリー氏は最下級の高教会派聖職者で貧困に喘いでいるが、大学時代には優秀な学者

であったばかりでなく、信仰の強さ、神の御旨の教区民への実践という点に関しては彼の右に出るものはいなかった。夫人も氏の良き理解者として夫と共に信徒への義務を忠実に果たしていた。グレイスはこうした両親から高教会派の正統の規範を受け継いただけでなく、父から受けたラテン語、ギリシャ語の素養が光り輝く判断力の優れた美貌の娘であった。

こうして見てみると、トロローブはトーリー主義を遂行できる作中人物に、“Old England”の精神を取り戻す役割を与えていることが分る。⁵⁾ 実際彼らの支配階級としての堅固な義務感、在郷志向、土地への愛着、反都市感情は、ウィッグの義務感の欠如、物質主義、不在につながる都市志向と対比されている。田園の伝統を受け継ぐ人々、つまりルフトン家、グresham家、ソーン家、デイル家、デ・ゲスト家(De Guest)、クローリー家、グラントリー家は全てトーリーである。こうした家から伝統から逸脱し、ウィッグの影響を受け物質主義に汚染され己の義務を忘れる者がでるが、彼らは根本的にはパターンリストで、最後にはトーリー主義が微動だにしない人物のお蔭で伝統的なトーリーの精神を取り戻すのである。

そうした“the champion of Torism”の第一例にルフトン夫人があげられる。彼女のトーリー主義に則ったパターンリズムは、次の引用に良く表れているー

She liked cheerful, quiet, well-to-do people, who loved their Church, their country, and their Queen, and who were not too anxious to make a noise in the world. She desired that all the farmers round her should be able to pay their rents without trouble, that all the old women should have warm flannel petticoats, that the working men should be saved from rheumatism by healthy food and dry houses, that they should all be obedient to their pastors and masters - temporal as well as spiritual. That was her idea of loving her country. (FP 16)

夫人の領民への思いやりには、領地を治めるには領民との緊密なつながりが必要であり、そのためには領地に留まり農作物の収穫高を調べ、領民が過不足なく暮らして行けるよう配慮することが領主の義務である、というトーリーの理想が表れている。当然、夫人はトーリーの良き“the Lady Bountiful”としての資格を有すると言えよう。

同様にスクワイア・デイルは頑固で非社会的であるが“[a] constant, upright, and by no means insincere man”(SA 5)として描かれている。語り手の彼への評価は、“our Mr. Christopher Dale was a gentleman”というくだりで見取れよう。彼はデイル家の伝統に則りカントリー・スクワイアとしての領民への義務を忘れず、教区牧師と協力して領地を治めていくというトーリーの理想を持った人物である - “They [the Dales] had been obstinate men; . . . just according to their ideas of justice; hard to their tenants - but not known to be hard even by the tenants themselves. . . they paid their way, and gave money in parish charity and in county charity. They had even been steady supporters of the Church . . .”(3). そしてアリングトンのもう一人の“a thorough-going old Tory”(129)であるデ・ゲスト卿も領地への愛着と関心ではデイルに引けを取らない。彼は“every acre of his own estate, and every tree upon it”を熟知している。彼の領地への愛着は農業に熱心なトーリーの領主の特色である。

ウラソーンのソーン(the Thornes of Ullathorne)老姉弟もまた風変わりではあるが、誠実で確固とした信条をもった愛すべき人々として描かれている。ハーディングの娘エリナー・ボールド(Elinor Bold)と「パーセットシャー物語」のヒーローの一人であるアラビン(Dean Arabin)の結婚を導く

のはソーン嬢である。言うまでもなく姉弟はトーリーで、“ Now the Thornes of Ullathorne were of the very highest order of Tory excellence ”(*DT* 22). とそのトーリー主義を描写されている。なにしろ “ Had Mr Thorne been trodden under foot by a Whig, he could have borne it as a Tory and a martyr . . . ”(*BT* 192). ほどのトーリーへの忠誠心の持主である。そしてグレシャム家を救うメアリの伝統的価値観を育てた伯父ソーン医師は、ソーン兄妹の又従兄弟でありグレシャムの良き相談相手であった。

・ トーリー主義

こうしてみると伝統的トーリー精神に裏打ちされて地主階級としての義務を認識しそれを全うしようとする人物は、例外なくトドロップの贅辞を受けている。マクマスター (Julia McMaster) はトドロップの良き領主の基準を適格に分析している - “ An estate-owner is judged according to the way in which he fulfills his role as landlord and squire, and perform his duties as well as collecting his perquisites. ”⁶⁾これにはトーリーの理想であるパターナリズムが反映されていることは言うまでもない。前述のルフトン夫人の領民への態度はこのパターナリズムの好例であるが、それは身分社会を肯定するトーリー主義に立脚している。つまり、“ Every man . . . should cultivate the region which Providence has assigned him. ”⁷⁾という考え、つまり人は己の分を知りそこで全力を尽くすべきである、という概念が根底にあることは言うまでもない。従って特権を持って生まれた支配階級には、身分が下の者の面倒を見る義務 - “ property has its duties as well as its rights ” - が発生するのである。

このトーリーの理想である領主と民の緊密な関係は不在地主では築きえないので、領主は領地に留まることを要求される。この点においてもトドロップの良き領主は要求を満たしている。例えば、ルフトン夫人は “ spent ten months of the year at Framley Court ”(*FP* 26)で、ロンドンでの社交界には最低限しか関わらない。デ・ゲスト卿は更に強い領地への愛着を示し、家畜の飼育に没頭し、家畜の品評会に出席せざるを得ない時にしかロンドンには赴かない。実際彼は忍び寄り物質主義にもかかわらずパストラル世界を守ろうとする “ a farming landlord ”であった。ウラソーンのソーン氏は年に一ヶ月から六週間 (*BT* 190)しかロンドンには滞在しない。そしてソーン医師は領地を相続はしなかったが、同様の性向を示す - “ Dr. Thorne was not a man accustomed to the London world; he kept no house there, and seldom even visited the metropolis. . . ”(*FP* 330).

この反都市の性向は、領民の福利厚生に配慮し土地を管理するには領主たるものは在郷でなければならない、という信念に支えられており、実際パーセットシャーの道徳、良心を体現している登場人物は全て在郷を理想としている。例えばデイルは跡継ぎである甥が職を辞しアリングトンに住み着くのを望んでいる - “ If he were my son it would be thought better that he should live here upon the property, among the people who are to become his tenants, than remain up in London ”(*SA* 354). そしてソーン医師はメアリの成金の従兄サー・ルイ (Sir Louis) にカントリー・ジェントルマンの義務は領地に留まり農業に勤しむことである、という自らの信念を植え付けようと躍起になる。こうした在郷志向は土地への執着に支えられており、それがトーリー主義の反映であることは、チャンドラー (Alice Chandler) が明らかにしている - “ the most significant quality of the Tory gentleman was his abiding attachment to the land. ”⁸⁾これはトーリーが土地こそが自らの存在基盤であることをよく理解していたからに他ならない。

一方ウィッグの領主達はロンドンでの暮らしを好んだが、それは必然的に彼らを不在地主にした。当然、以前は“a great courtier”(FP 173)であったが最近では通風と腰痛、権力の低下の為に領地に留まっているデ・コーシー伯爵のような民を顧みない領主は、トーリーの語り手に鋭く批判されている。作品中描かれているウィッグの不在性向が実際のウィッグの姿とかけ離れたものでないことは、ロバーツ(David Roberts)の次の主張から分る - “Many of their [the Whigs’] fathers possessed London houses and many of them more than one country house. They also visited the houses of Whig cousins and were often in Europe. They were mobile and so had fewer local roots” (236 下線は筆者)。

ウィッグの都市志向はまた散財を余儀なくした。グレシャム家がデ・コーシー出身の妻の為に経済的苦境に陥っていることは既に述べたが、その大本のデ・コーシー家とて例外ではなかった。リリー・デイルとの婚約を破棄したクロスビはデ・コーシー家の家名と財力を当て込んで盛りを過ぎたアレクサンドリナと結婚するのだが、デ・コーシー家には期待していたほどの財力はなく、アレクサンドリナの贅沢と相俟ってクロスビを苦境に陥れる。またサウピイ家は“Crown property”(FP 23)であった見事な獵場を所有する旧家であったが、遊興に耽った為に手放す羽目になってしまっていた。このような先祖代々の領地を減らし義務を蔑ろにさせる都市志向はトーリー主義に反することは自明の理であろう。従ってトロローブは拝金主義に陥って領民との関係を軽視する支配階級を烈しく糾弾しているのである。

トーリー主義は聖職者にも領主同様に郷にいることを求めている。支配階級の一員として、彼らも又信徒の世話を物心両面にわたって試みるのが求められていた。とするとルフトン夫人がマークにフラムリーに留まり牧師としての義務を果たすことを強く希望していた訳が飲み込める。領主と牧師が共に手を携えて田園の階級社会を治めて行くことが、トーリー主義の真髄なのである。*Paternalism in Early Victorian England*でロバーツは次のように述べている - “It was only in the parish and county, only with the rule of landlord and parson, that a hierarchical, authoritarian, and organic society could be preserved. Such a rule lay at the heart of Tory paternalism. It was for this reason that Tory reviewers disliked philanthropy and political economy”(72)。従ってこの理想の実現にむけて努力するルフトン夫人やスクワイア・デイルが好意的に描かれているのも納得できよう。一方この理想に反し、領地に腰を落ちつけず領民への義務を疎かにしているウィッグの支配階級をトロローブが嘲笑しているのは、自然なことである。

都市偏向へのトロローブの嫌悪もまたトーリー精神に端を発している。都市では責任を持って民を守る領主がおらず、貧民は顔の見えない慈善事業に頼ることになるが、それは伝統的な権力構造を覆す危険性があった。つまり慈善事業は受け手に感謝の念を明確には喚起しない一方で、田園社会のノーブレス・オブリージを行う支配階級は、貧者の心に恩人として刻まれる。その結果貧民は支配者を敬い、身分社会の存続は容易になるのである。実際身分制度はトーリー精神の要である - “That society should be hierarchic and authoritarian few Tory reviewers doubted, since only through inequality and obedience would there be permanence and order - the basis of . . . ‘the unalterable nature of our social pyramid’”(Roberts 69)。

さらに大都市は個人主義を奨励することも保護者と保護される者の絆を弱め、改革好きの中央政府が伝統的なパターナリストに取って代る。無論このような状況は“the principles of dependency and deference”(83)を骨抜きにし、パターナリズムが崩壊する元となる。従ってトロローブが伝統的な田園社会の重要性を理解しないウィッグの都市志向を非難するのは当然と言えよう。彼の考

えには “ a Whiggish or reforming tone ” (Chandler 153) に見られる自由主義を嫌うトーリー主義が反映しているが、変化をもたらす自由主義がトーリーに嫌われることは、チャンドラーの次の説明から理解できる - “ Attached to the land, jealous of his time-honored role as squire and magistrate, opposed to the dangers of centralization, the typical Tory was, with a few significant exceptions, hostile to unnecessary alterations ” (84) . そしてウィッグはこれとは対照をなす - “ Raised in the historic tradition of Whig reform and progressive thinking - of 1688 and civil and religious liberty - they also saw no need to turn to the medieval past ” (Roberts 236 下線は筆者) . 先に引用したルフトン夫人の理想に窺えるように、トーリーは伝統的階層社会を擁護し、夫人のように英国が “ feudal ” で “ chivalous ” (DT 14) であり、保護者と保護される者の間の絆が存続する封建制を希求したのである - “ The Tory reviewers also wanted an organic society, a society they associated with feudalism. Their enthusiasm for feudalism was astonishing ” (Roberts 69) .

トロローブはまた自分が擁護するトーリーの登場人物を由緒ある家系の出として描いているが、それがやはりトーリー主義によるものであることは、トーリーの歴史家が “ saw their own class privileges rooted in the medieval past ” (Chandler 84) していたことで分る。グreshamズベリーは “ a fine old English gentleman’s seat ” (DT 12) であり、館は “ the finest specimen of Tudor architecture of which the country can boast ” というくだけで、グresham家の由緒正しさが述べられる。また “ Dr. Thorne belonged to a family in one sense as good, and at any rate as old, as that of Mr. Gresham; and much older, he was apt to boast, than that of the De Courcys ” (19) . である。なにしろ “ There was no better blood to be had in England ” (26) . であった。そしてアリングトンのデイル家とデ・ゲスト家も例にもれない - “ The squires of Allington had been squires of Allington since squires, such as squires are now, were first known in England ” (SA 1) . そして “ His [Lord De Guest’s] peerage dated back to the time of King John, and there were but three lords in England whose patents had been conferred before his own (130) . - といった具合である。又ウラソンのソーン氏は祖先をノルマン人の征服、つまり 1066 年の遙か前迄辿ることができた (BT 190) , 更にクローリーの親友でグラントリーの義理の弟となるアラピンは、旧家 “ the Arabins of Uphill Stanton ” (191) の出身である。若かりし頃はオックスフォード運動に身を投じたトラクタリアンであり、今は高教会派の聖職者である彼はしばしば “ the sacrilege daily committed by the Whigs ” (192) を憤慨している。

このようにトロローブが擁護しているトーリーの人物が由緒ある名門の出であるということは、オムニウム公爵やデ・コーシー伯爵家の爵位が歴史が浅く、経済的、社会的成功により授与された可能性を示唆している。厳然とした揺るぎ無い階級制度が支配しているように見える英国は、実は制約があるにしる “ removable inequality ”⁹⁾ のある国であったのであるから、労働者階級から貴族にまで成り上がることは十分可能であったのである。実際メアリの伯父、サー・ロジャー (Sir Roger Scatcherd) は石工から出世した人物として描かれている。トロローブの古い家系の人物に対する思い入れは、まさにトーリー主義の反映で、トーリーの支配階級が田園社会の正統な統治者である、という概念の影響を受けたものと言えよう。

これ迄の考察で「パーセットシャー物語」がトーリー主義の特徴を備えた作品群であることが分った。更にチャンドラーがトーリー主義と中世主義の関係を “ affinities between Toryism and medievalism are not hard to understand ” (83) と指摘しているように、「パーセットシャー物語」は明確なトーリーとウィッグの対比のみならず、反都市の感情、去り行く “ Old England ” への惜別の

思い、伝統的精神文化の擁護とその継承の模索等、中世主義の特徴を備えた作品群である。

・ヤング・イングランドとオックスフォード運動

パーセツトシャーのトーリー主義は、ヴィクトリア朝にディズレイリ (Benjamin Disraeli) が率いた “ Young England ” 運動と軌を一にするものである。この運動はヴィクトリア朝後期のウィリアム・モリスの社会主義同様、中世主義の政治的表象であるが、“ Young England ” という名前とは裏腹にまさに “ Old England ” への回帰を志向していた。ディズレイリは1845年にヤング・イングランドの実質的な宣言である *Sybil* を上梓した。これはその副題 “ The Two Nations ” が示すように、富める者と貧者の隔たりを嘆いた作品であるが、ディズレイリは若き貴族に支配階級としての理想を思い起こし、労働者階級への務めを果たし、中世に存在した (と彼が思った) 領主と領民との絆を復活させるよう訴えているのである。イエイツ (Nigel Yates) は述べる - “ The group supported . . . the alleviation of poverty and improvements in social conditions but allied these to increasing the power of the throne, the Church and the landowners. What they effectively advocated was a new and caring feudalism. ”¹⁰⁾

このような懐古的態度でヤング・イングランドの面々は、産業革命により増幅された近代的な問題を乗り切る為に、支配階級の良心を喚起したのである。彼らは中世に行われていたように、特権階級には恵まれない者を保護する義務があると主張した。つまり特権には義務と責任がついてまわるというパターンリズムとノーブレス・オブリージの論拠となる概念である。トーリーはその基本方針を理解しているので、大衆を指導するのはトーリーの手に乗ねるべきである、とディズレイリは既に1835年7月2日の書簡で主張している -

I still am of opinion that the Tory party is the real democratic party of this country. I hold one of the first principles of Toryism to be that Government is instituted for the welfare of the many. This is why the Tories maintain national institutions, the objects of which are the protection, the maintenance, the moral, civil, and religious education of the great mass of the English people: institutions which whether they assume the form of churches, or universities, or societies of men to protect the helpless and to support the needy, to execute justice and to maintain truth, alike originated, and alike flourish for the advantage and happiness of the multitude. (*Letters*, July 2, 1835 下線は筆者)¹¹⁾

こうしてトーリーが “ the natural leader of the people ” (187) であるという強い信念の下に、ディズレイリはヤング・イングランドを率いウィッグの優勢に挑戦したのである。ギャラガー (Catherine Gallagher) によると、彼は政治的代表権は “ an inherited privilege ”¹²⁾ であるので、労働者階級はチャーチストが求めるように労働者が代表するのではなく、貴族階級により治められるべきであると考えた。そして *Sybil* では産業革命により発生した工場労働者達は、古い名門の貴族により治められべきであると主張したのである。ギャラガーは述べる - “ This newest industrial class, moreover, should not be represented by the new usurping aristocrats created since the Reformation, but by the old Norman or, better still, Saxon aristocracy ” (202) . まさにこれはトロローブの旧家偏愛と重なるではないか。

このように中世主義の政治的表象であるヤング・イングランド運動と作中随所に見られるトロロープのトーリー主義には共通点があり、「パーセットシャー物語」は中世主義が色濃い作品であることが分った。とすると作中トーリー主義を信奉する人物は明らかに高教会派であるか、高教会派の人物と関係が深いことも頷ける。実際中世主義の政治的表象がトーリー主義であったのと同様、その宗教的表象は高教会派が主導したオックスフォード運動であったのである。

1830年代にキーブル (John Keble) とニューマン (John Henry Newman) の主導の下に一大宗教運動となったオックスフォード運動と中世主義の関連についてチャンドラーは次のように語る――

One area in which medievalism was deliberately used as a counter-force to liberalism was in religion. The Oxford movement has been defined as medievalism in religion, and certainly much of its content lay in a renewed concern for the Middle ages. Hurrell Froude's *Remains*, for instance, one of the significant documents of the movement, shows a consistent fascination not only with the medieval church - its austerities, its miracles, its saints' lives - but with the medieval relationship between secular and religious government. (153)

またイエイツが述べるように、国教会がジェントリーや貴族と手を組むあまりに、労働者階級との絆が弱まっている、という意識が教会内部に高まっていた (65)。これはディズレイリが地主階級と民の間の絆が弱まっていたことに持った危機感と共通する。教会の基本的役割は民の牧者となることであったので、良心的な聖職者がこうした状況に疑問をもったのは当然であろう。またトラクタリアンの中世の教会への憧れにも似た回帰願望は、“to counteract the growing rationalism within the Church and to make the Anglican religion once again a mystery and a faith” (Chandler 154) しようとの願いから起きていた。科学の発展に支えられた産業革命は理性の感情に対する勝利、という一面もあるので、人心が理性で説明できないものに傾斜するのは避けられなかったのである。

このように中世主義、トーリー主義、オックスフォード運動には相関関係があるので、「パーセットシャー物語」のトーリーの人物が宗教的には高教会派に属するのも不思議はあるまい。まずグラントリー、アラビン、クローリー、ハーディングといった聖職者が高教会派に属しているし、非聖職者でもルフトン夫人が高教会派のグラントリー一家と宗教的にも利害が一致していることは、“the archdeacon [Grantly] was the very type of that branch of the Church which she venerated” (FP 133) と明確に述べられている。またグreshamズベリーでは “very high-church principles” (DT 327) の持主で、プラウディー派の様な “the low-church severity of demeanour” (328) には侵されていないので教区民に慕われる教区牧師が、グresham家の娘と結婚することからグresham家は高教会派であることが分る。アリングトンではリライがグレイス・クローリーと親交を結んでいることが、その高教会主義を示唆している。そしてウラソンの聖エオルズ教会 (St. Ewold's) には高教会派のアラビンが赴任し、更に教会とソン家の館の親密さが暗示される - “The picturesque old church of St Ewold's stands immediately opposite to the iron gates which open into the [Ullathorne] court. . .” (BT 201)。確かにパーセットでオックスフォード運動に実際に関わったのはアラビンのみで、教区が運動からは多少距離を置いていたことは事実であるが、伝統的な勢力であった高教会派が、プラウディー派の侵入により低教会派との対決姿勢を強め、その古い習慣を維持、復活させようとする点には、オックスフォード運動との類似点が見てとれよう (BT 39-40)。

トロロープが高教会派に肩入れする様はまたプラウディー派の行きすぎた福音主義を揶揄してい

ることにも窺える。福音主義は18世紀末にプロテスタントの間に広まり、特にメソジストとの関係が深かったが、ヴィクトリア朝には中産階級の興隆に伴い宗派の枠を超え社会全般に影響を与えていた。つまり端的に言う、「Evangelical morality, but not Evangelical metaphysics, stuck and then transferred itself to the larger culture.」¹³⁾で、国教会内部でも特に低教会派にはその強い影響が見られた。作中のブラウディー派にはその傾向が強く、特に夫人とスロウプは安息日を厳格に守ること - “a perfect abstinence from any cheering employment on the Sunday”(BT 21) - を大衆に求め、大衆が楽しみにしている娯楽を奪おうとするような固い宗教心の持主である - “... there are three trains in and three out every Sabbath. Could nothing be done to induce the company to withdraw them? ...”(33)。トロローブは根底では夫人の善意を認めてはいるものの、“her sense of moral duty, her reforming obsession, her Grundyism, her earnest certitude, and her utter lack of humor”¹⁴⁾を福音主義の弊害として嘲笑している。実際当時福音主義に反感を持っていた人々は、福音主義者は貧しい者の快樂を抑圧するが、金持ちの快樂には目をつむる、と非難した。¹⁵⁾こうした点が福音主義が労働者階級には普及しなかった一因であろう。

このようなブラウディー派の教条主義と好対照をなすのがウラソン姉弟である。二人が催す“Ullathorne games”は確かに時代錯誤で過去の幻影を引きずってはいるが、この会は、“the scene for clarity and rejuvenation”(Kincaid 110)となっている。なによりもドルイドの遺物であるかのようなソーン嬢の暖かさ、優しさと、ソーン氏の誠実さが好意的に描かれ、こうした二人の徳がその地域の人々のほとんどをもてなすことになり、普段辛い労働に耐えている労働者に楽しい一時を与えるのである。ソーン姉弟のこの催しはヤング・イングランドの指導者の一人で、高教会派のジョン卿(Lord John Manners)の*A Plea for National Holydays*(1842)での主張のパロディとも言える。本書で卿は、全ての階級の和を回復する術を詳述し、平日を健康に働くには、“revival of NATIONAL HOLY-DAYS and RECREATIONS”(Chandler 163)が必要であると説いた。ソーン姉弟の“Ullathorne games”はまさにジョン卿の説く、身分を問わず万人が楽しんだ村祭であろう。

卿はその前年1841年に*England's Trust*を出版し、高教会の信念とトーリーの中世主義をもって富者と貧者を連携させることにより、飢えた40年代の政治的、社会的問題の解決を訴え、身分に関係無く万人が教会で共に祈った中世の伝統を回復することを主張している。こうした主張は、トロローブのトーリー主義と高教会派擁護と重なることは言うまでもなく、作品のトーリー主義と高教会派との関係を納得させるものである。ウィッグの冒瀆を嘆く有徳の士アラピンが、若かりし頃はトラクタリアンで出自が由緒ある家柄である、というのは偶然ではあるまい。

このように「パーセットシャー物語」は政治的にも宗教的にも中世主義が反映した作品であり、伝統的にトーリーで高教会派の勢力圏にウィッグと低教会派の勢力が侵入し、伝統的な精神遺産が脅かされる様を描いている。大土地所有制を基盤にした田園の階層社会が商工業の発展に押されて弱体化する過程で、本来搾取を基に機能していた田園社会を、トーリーのジェントリーと聖職者を中心にした「有機的」共同体として理想化し、消え行く体制“Old England”を惜しむ中世主義が、トロローブのトーリー主義を通して表現されている。そして抗がえない時代の波を受けてトーリーで高教会派陣営が、都市の自由主義、功利主義、個人主義、理知主義の洗礼を受けたウィッグや低教会派の脅威と戦うが、新勢力の圧倒的優勢の前に旧勢力は敗退するかのように見える。しかしトーリーの伝統的価値観、規範を持つ人物の活躍によって旧勢力が領地と伝統的精神遺産を守る結果は、トロローブのトーリー主義への希望が潰えていないことをも示唆している。

註

本稿はThe Eleventh International Conference on Medievalism (Kalamazoo College, Michiganに於いて1996年9月4日-7日に開催)で口頭発表した原稿に加筆し邦文にしたものである。

- 1) “The Chronicles of Barchester” は *The Warden* (1855), *Barchester Towers* (1857), *Doctor Thorne* (1858), *Framley Parsonage* (1861), *The Small House at Allington* (1864), *The Last Chronicle of Barset* (1867) から成る。
- 2) Anthony Trollope, *Doctor Thorne* (1858; Boston: Houghton Mifflin, 1959) 6. 以後本作品からの引用は全てこの版により、引用末尾の括弧内に必要ならばDTと略記し頁数を示す。他の「パーセツトシャー物語」からの引用は、*Barchester Towers* (1857; Harmondsworth: Penguin, 1982), *Framley Parsonage* (1861; Oxford: Oxford University Press, 1988), *The Small House at Allington* (1864; Oxford: Oxford University Press, 1988) で、同様にそれぞれ引用末尾の括弧内に必要ならばBT, FP, SAと略記し頁数を示す。
- 3) トロロープが好意的に描く人物をチューダー様式の館に住まわせる事が多いことはよく指摘される。例えばJames R. Kincaid は *The Novels of Anthony Trollope* (Oxford: Oxford University Press, 1977) で述べている - “Mr. Christopher Dale is the moral touchstone of the novel; he is a gentleman, and, moreover, his house, like Ullathorne, has Tudor windows. The symbolism is quite unmistakable” (129).
- 4) 高教会派で恵まれた職を持ちながら、咽の治療にイタリアに行ったまま12年も不在を続け自堕落な生活を送っている Stanhope 一家にも、信徒への義務を全うせず伝統的共同体を崩壊させる聖職者の姿が重なる。
- 5) メアリ、ルーシー、グレイスの三人は、伝統的な価値観、ノーブレス・オブリージの精神、知性に支えられた優れた判断力の故に、出自は地主階級ではないにもかかわらず “the lady of the manor” として迎えられ、その若い生命力でカントリー・ハウスに象徴される伝統的精神遺産を継承し、活力を失った旧家を活性化させる “blood restoration” の例である。このタイプのヒロインは英文学上でよく見られる。詳細は拙論 “Fanny Price and Molly Gibson - Bearers of the Country House Tradition,” *Gaskell Society Journal* 10(1996): 92-100、および “Trollope’s Admirable Women and their Literary Sisters,” *The Victorian Newsletter* 91 (Spring 1997): 31-9を参照されたい。
- 6) Juliet McMaster, “Trollope’s Country Estates,” *Trollope Centenary Essays*, ed. John Halperin (New York: St. Martin’s Press, 1982) 72.
- 7) David Roberts, *Paternalism in Early Victorian England* (New Brunswick, NJ: Rutgers University Press, 1979) 4.
- 8) Alice Chandler, *A Dream of Order: The Medieval Ideal in Nineteenth-Century English Literature* (Lincoln: University of Nebraska Press, 1970) 84.
- 9) Asa Briggs, *Victorian People*, (1954; Harmondsworth: Penguin, 1980) 106. この “removable inequality” により、英国では新興中産階級のジェントリー同化願望がこのほか強く、それが王室を頂点とした身分制度の存続に寄与した。ジェントリー同化願望については、Martin J. Wiener, *English Culture and the Decline of the Industrial Spirit 1850-1980* (Harmondsworth: Penguin, 1981) を参照されたい。
- 10) Nigel Yates, “Pugin and the Medieval Dream,” *Victorian Values*, ed. Gordon Marsden (London: Longman, 1990) 68.
- 11) Gertrude Himmelfarb, *Marriage and Morals among the Victorians* (1975; New York: Vintage, 1986) 186-7.
- 12) Catherine Gallagher, *The Industrial Reformation of English Fiction: Social Discourse and Narrative Form 1832-1867* (Chicago: University of Chicago Press, 1985) 202.
- 13) Michael Mason, *The Making of Victorian Sexual Attitudes* (Oxford: Oxford University Press, 1994) 64. メイソンは更に詳述する - “the Evangelical creed was largely stripped of its specifically religious components as it moved into an ascendant position in people’s moral codes. Victorian men and women, it is claimed, embraced the principles of sobriety in dress and speech, strict observance of the Sabbath, close moral control of household activities and children’s education,

ostracizing of the sexually lax, and so on, while they believed only partly or not at all in the key theological doctrines of Evangelicalism. . . "(64).

14) Robert M. Polhemus, *The Changing World of Anthony Trollope* (Berkeley: University of California Press, 1968) 38.

15) James Obelkevich, "Religion," *The Cambridge Social History of Britain 1750 - 1950*, Vol. 3, ed. F.M.L. Thompson (Cambridge: Cambridge University Press, 1990) 323.